

変容するのだろうか。

Gerald Bonner,
Freedom and Necessity:
St. Augustine's Teaching on Divine Power and Human Freedom,
The Catholic University of America Press, 2007, pp. xii+142.

菊地伸二

これまで長年にわたりアウグスティヌス研究を続け、なかでもペラギウス主義に関する重要な論文、著作を発表してきた著者によって書かれた本書は、2001年に彼がマルタ大学で行った講義が基になっている。全体は、序文、序論と七つの章から構成されているが、『自由と必然性——神の力と人間の自由についての聖アウグスティヌスの教え』と訳されるこの作品の意図については、著者は「序論」で次のように述べている。すなわち、「私の意図は、アウグスティヌスが、一連のペラギウス論争において強調し擁護した予定の神学について精査すること、また、恩恵の影響下にあるにもかかわらず、墮落した人間は自由選択を行使する機会を有しており、責任ある行為者であるという絶えざる主張が如何に確固たるものであるかを考察することにある」と。また、彼は本書において、異端でも分派でもないペラギウス派に対して、なぜアウグスティヌスがあればほどまでに激しく攻撃をしたか、また、教会に属するすべての人々には、人類の墮罪ということの故に洗礼をあればほどまでに強要したかということの問題として提起している。

著者によれば、アウグスティヌスの予定の神学の本質は、神の全能性の確信に他ならないという。神の全能性は、何よりも、神が万物を無から創造したということのうちに示されており、その無からの創造の教えは、マニ教に代表される二元論的な異端を排除する際に大きな役割を演じた。さらにこの教えは、神と人類との関係にだけでなく、神の摂理の教説にも及ぶことになり、神の意図に反するものに変化をもたらすような人間の意志に対する抑制という考えにつながっていき、最終的には、不従順な子どもへの神の罰を強調するに至るのである。

ところでアウグスティヌスは、この神の全能性の延長上に位置づけられる予定の神学の主張を行う一方で、他方で、被造物は神によって善きものとして造られたものであり、新プラトン主義や「創世記」の〈神の像〉の教えにも示されるように、人間の魂の神に対する憧憬の動きということについても語っており、彼の思想の中には、圧倒的な神の力の主張だけでなく人間の側からの働きかけについての主張も認められることは確かである。

もっとも著者は、多くの研究者と共に、396年の『シンプリキアヌスへ』において、アウグスティヌスの中で恩恵と自由意志との関係について決定的な変化が起こったことを認めており、人間の自由意志に対する神の恩恵の先行性の主張がここから始まったことを確認している。

ただ、人間は墮落状態にあっても、その神の像は、アダムの最初の罪によって完全に消されることはなく、起源を樂園に有するという痕跡を幾分は留めており、墮落した人間のうちにも不死への憧憬はあり、それが存在しているというまさにそのことにおいて、神へとつながっており、その限りで、墮落した人間性といえども、それ自体において自由であると見做されている。

さらに第3章「アウグスティヌスの精神における自由の本性」では、無神論的哲学者の見解をあげながら、彼らが共通して人間の自由と神の予定は両立しないと考えるのに対して、アウグスティヌスによれば、人間の自由とは神から独立したものではなく、その反対に、神をただ所有し神に所有されることによってのみ、自らを現実化するものであり、神にあずかる高度の分有である神化がなされればなされるだけ、その自由性は増していくことが言われる。それは、人間が神との愛において、神を愛することを望むことにより、その愛される者に固着することにますます関心をもつようになることに比せられる。

では、ペラギウス論争において、両者の間ではどのような違いが明らかになっていったのであろうか。

第4章「自由と責任」では、〈よい行い〉ということが考察されるが、ペラギウス派によれば、それは三つの要素、すなわち、その可能性、その意志、その行為から検討され、〈よい行い〉の可能性については、神が人間に与えるものの、それを意志し、それを行うのは人間の側にあると見做している。とくに、ペラギウス派のエクランムのユリアヌスの言葉によれば、人間は〈神から解放された〉状態にあるとされる。他

方、アウグスティヌスによれば、〈よい行い〉を意志することについても、神の恩恵を必要とするのであり、この点が異なっている。

このような両者の相違は、著者によれば、つまるところ、アダムの最初に犯した罪がその子孫たちに与えた影響についてどのように考えるか、ということに依拠しているという。

〈自由と責任〉をめぐる〈責任〉に関しては、ペラギウス派は、意志と行為については人間の側にその能力を認めるので、個々人の責任を重視する。一方、アウグスティヌスは、この世界での人間社会のことを主要な意味では問題とせず、最終的に選ばれた者の救いまでを射程に入れており、〈責任〉に関しては、楽園で罪を犯したアダムの人格のうちに全人類を一体化させることにより、彼の責任を全人類（＝わたしたち）に共有させている。

また、第5章「自由についてのアウグスティヌスの最後の神学」では、アウグスティヌスとペラギウス派は、〈この世界での〉人間における〈よい行い〉を実現する能力をめぐる見解において異なっていることが言われ、さらには、ペラギウス派によれば、教会の聖性は、その成員の聖性に由来するものであるが、アウグスティヌスによれば、それは、教会がその体であると言われるキリストの聖性に由来していることが述べられる。

「結論」においては、アウグスティヌスによれば、この世界での人間における〈よい行い〉は、それに先立つ神の恩恵があって始めて可能になるのであり、それは396年の『シンプリキアヌスへ』以来一貫しており、また、400年頃には、彼はそれまでの洗礼についての見解を改め、救いのためには洗礼が不可欠であることを主張するようになっており、よってアウグスティヌスはペラギウス論争において、表現こそは激しくなった点はあるものの、その論争の中で彼の思想が変化したわけではないと述べられている。ただ、ペラギウス論争においては、アウグスティヌスの主張の背景には、アフリカの教会の当時の状況が大きく影響しており、そのことがペラギウス派に対するより激しい批判につながっていたことも指摘されており、実践的な場面では、彼は人間の自由意志を認めていたにもかかわらず、論争の中では彼の主張の一側面だけが強調されている。他方、ペラギウス派といわゆる一括りにされているが、ペラギウスは個人的には決して好戦的でなかった側面についても同情の眼差しを向けており、そのような当時の論争にかかったバイアスを考慮に入れながら、両者の考え方の長所、

欠点を比較することも試みている。

著者は、総じてアウグスティヌスがさまざまな論争において弁論的に議論を展開しようとするあまり、自らの神学についての包括的な理解（スンマ的な理解）をすることに至らなかったことは非常に残念であると述べている。

G. ボナーが、全能性の主張の延長上に予定の神学を置いているということについては、たしかにそのような見方も可能であるし、また、ペラギウス論争を当時の教会の状況と絡めながら考察し、その帰結として、ペラギウス派を反駁する作品からは、アウグスティヌスの自由については、彼の有している理解の一面だけが強調されるという見解についても納得できる点がある。

ただ、このような著者の主張の前に、それでもアウグスティヌスの自由について全体的な理解をしようとするならば、わたしたちはどのようにしたらよいのであろうか。ペラギウス論争に関わる作品からはそのような主張を読み取ることができないとしたら、それをどこに求めたらよいのであろうか。これについては、たとえば、著者が挿入的に秩序、美について言及している箇所（pp.35-38）を併せて考察していくことも有効な手立てであるとは言えるだろう。

しかし、本当にペラギウス論争の中から、アウグスティヌスの自由についての全体的な理解を読み取ることが不可能なのであろうか。たとえば、わたしたちは、セミペラギウス主義者に対して書かれた著作について、より丹念に読む必要があるのではないだろうか。ただ、このことについて著者は、アウグスティヌスが当時の教会の影響を受けてかなり定式化した主張をしていると見做しているために、必ずしも十分にその思索を展開していないように思われる。またそのことと関連して、著者が掲げた表題の『自由と必然性』の、とくに〈自由〉と〈必然性〉との間の動的な関係、絡み合いについては、全体として希薄になっているという印象を受けることも確かである。
